

II 昭和55年度報告

(I) ティラピアを餌料としたカンモンハタ Epinephelus merra (BLOCH) の成長試験

カンモンハタの食性は肉食性で非常に貪欲である。増殖が容易なティラピア類を餌料としたカンモンハタの成長試験を行い、その活餌料としての価値を検討した。

1 材料と方法

供試魚のカンモンハタは、1980年5月に沖縄県玉城村から漁獲されたものを当水試で約2ヶ月間飼育して用いた。試験は屋内の1tコンクリート水槽に隠れ場としてコンクリートブロックを2~3個配置し、ティラピア活餌料区と冷凍魚餌料区(対照区)の2区を設けて、カンモンハタを各々10尾ずつ入れた。試験期間は7月31日~9月11日の6週間で2週に1度測定を行った。

また、期間中の水温は29.2~31.9℃であった。

餌料のティラピア類は、ティラピア・モザンビカ (Tilapia mossambica) とティラピア・ニロチカ (T. nilotica) を用いた。ティラピア・モザンビカは、当水試の10tコンクリート水槽1面で海水で繁殖した稚魚用い、ティラピア・ニロチカは、当水試で生産した稚魚を海水馴化した後用いた。餌料としてのティラピアは2~5cm、1~5g程度のものを主に用いた。対照区の冷凍魚餌料区は、イワシを主に数種の魚を用い、2×3cm程の切り身(骨なし)にして与えた。給餌時間は17時頃で給餌量は多少残餌が出るように行った。残餌の測定は、冷凍魚餌料区では毎日9時頃、ティラピア餌料区では2週間ごとのカンモンハタの測定の際に行った

2 結果と考察

結果は表-1と図-1に示した。6週間の試験で増重量は、冷凍魚餌料区で平均7.2gティラピア餌料区で平均7.0g、増重倍率は、冷凍魚餌料区で1.12、ティラピア餌料区で1.11であった。両区とも図-1に示すようにほぼ同様な成長を示した。但し、ティラピア餌料区の8月28日の値がやや低下しているのは、その前後にへい死魚が3尾みられ、それらの体重減少が平均重の低下に影響している。へい死する数日前からは、活力が低下し、餌をほとんど摂らなくなるので、へい死時のカンモンハタは、かなり体重が減少した状態となっている。

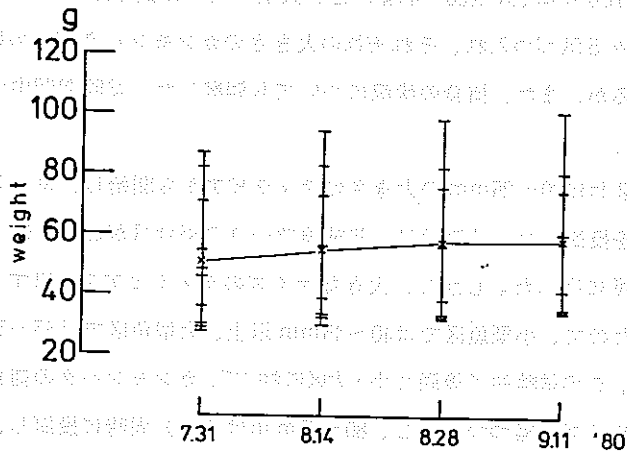
摂餌量は冷凍魚餌料では2.0~2.5g/尾・日、平均2.2g/尾・日、ティラピア餌料では1.8~3.1g/尾・日、平均2.3g/尾・日であった。カンモンハタの体重に占める割合は冷凍魚餌料で3.6~4.4%、平均4.0%、ティラピア餌料では3.5~5.6%、平均4.2%で、摂餌量についても両区ともほとんど同様な結果であった。

以上のようにティラピアを餌料として養成したカンモンハタの成長及び摂餌量は、冷凍魚肉を餌料とした場合と比較して明確な違いは認められなかった。従って、ティラピアはカンモンハタ

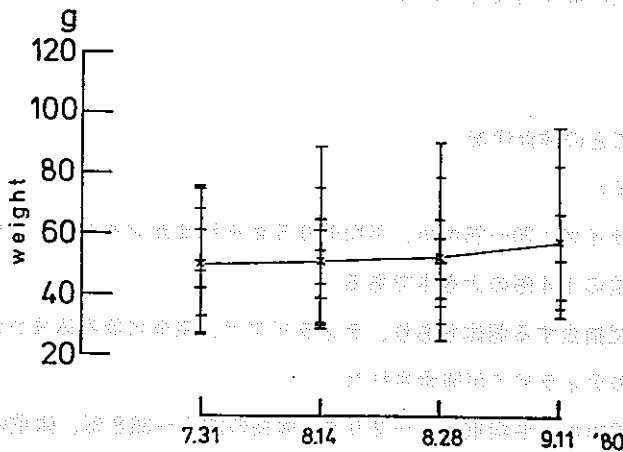
の餌料として充分利用できるものと思われる。

表一 ティラピアを餌料としたカンモンハタの成長試験結果 (昭和55年7月31日～9月11日)

	総魚体重(g)		尾数		平均魚体重(g)		増重倍率	日間増重率(%)	(g)	(%)
	開始	終了	開始	終了	開始	終了				
冷凍魚餌料区	417.9	467.1	10	8	52.3	58.4	1.12	0.26	746.6	6.59
ティラピア餌料区	366.1	404.8	10	7	52.3	57.8	1.11	0.24	671.2	5.77



1. 冷凍魚餌料区



2. ティラピア餌料区

図一 カンモンハタの成長